

## 謝辞

このたびは名誉ある長塚節文学賞を賜りましたこと、誇らしく感激の極みでございます。受賞者を代表しまして、ここに感謝の意を表したいと存じます。

短歌・俳句・短編小説の三部門あわせて、1万6272点という応募の中から入賞と言つ栄に浴しました我々は、審査に当たってくださった先生方のご期待を裏切らぬよう、今後なお一層の研鑽を積むことを心に誓つてまいります。

個人的な思いで恐縮でございますが、私のふるさと愛媛の誇る俳人・正岡子規、そして松山にえにしの深い夏目漱石、このお二人が長塚節さんの人生に大きく影響を与えたことを考えますと、愛媛県人であります私が今回大賞を授かったことに対しまして、心中秘めやかに奮い立つものを感じる次第でございます。

そして、もう一つ付け加えさせて頂きますと、今日、私と一緒にこの会場に参っております息子の出身高校は、長塚節さんが師と仰いだ正岡子規の母校松山中学・現在の松山東高校でございます。

今も松山東高校の敷地内には藩校・明教館が重要文化財として保存されております。年に一度、十一月の文化祭の時のみ「お茶室」として一般開放されておりまして、中に入りますと司馬遼太郎さんの小説『坂の上の雲』の主人公・秋山好古、真之兄弟と並んで正岡子規の遺影が大きく掲げられております。

遠い昔、長塚節さんが多感な十九歳の時に正岡子規の書いた『歌よみに与つる書』を読んで子規に傾倒するようになり、数々の優れた短歌を発表し名声を博していったこと。続いて、東京朝日新聞に発表した『土』を夏目漱石に絶賛され、小説家としても後世に名を残すようになったこと。

こうした出会いに思いを馳せていきますと、愛媛県人であります私が石下町を含め茨城県民の方々に対して何かしらノスタルジックな気持ちを持つと申し上げても、決して過言ではございません。

最後になりましたが、長塚節文学賞の益々の発展を祈りますと同時に、石下町の町長様はじめ、石下町の皆様の繁栄とご多幸を祈って、感謝の言葉と致したいと存じます。

平成十六年九月二十日

松本敬子